

埼玉県 の 民 家

山 崎 弘

1. ま え が き

一般に地方の農，山，漁村の人達の住いが民家と呼ばれている。従って，民家は人と共に生きているものであるから，日常の生活が向上すれば自然住様式の改善も考えられ，実行されてくる。そうして民家の形は刻々と変り，古いもののほど次第に地上から姿を消すものと思われる。これは農，山村の生活が合理化されなければ取り残されていく時でもあり，また民家の屋根（茅葺）の危険性，間取りの不経済性，あるいは家屋全体の腐朽等が改善の理由として挙げられるのである。従って，古い民俗生活のあり方が少しでもわかるうちに，一つでも多くの民家の原形採集を行い，確実な資料を得るのが急務と思われる。

然しながら，神社，仏閣の様に無住がないのが何かと障害となり思い通りにゆかぬのが現状である。そこで近郊の民家を選ぶのが妥当のようなので，東京の都市文化の刺激が多く変遷し易い埼玉県下の民家を選び採集を行った。

埼玉県の民家は，平坦地のため好味をそそのめるものはない，然し細かい部分までみると種々と変化に富んだ処もみられる。即ち，屋根の形，間取り，その他があげられる。先ず，屋根形式の分布状態，間取りの概論を述べ，採集した民家について説明してゆこう。

2. 屋 根 形 式

民家で気のつくのは形である。そのうちでも屋根の形は自然にとけこんだ魅力ある要素をもつと同時に各地方の特色も表してくれる。

埼玉県にあっても4つの形に分けられる。その分布は一概には云えないが，図-1，に示すようなものがある。即ち，寄棟は，県下全体にみられ，切妻屋根は，県の北西，秩父地方にあり，これは長野，山梨方面からの伝播と思われる。切屋根は，児玉，比企，入間郡の比較的丘陵地の養蚕農家に発達している。また，入母屋は，北多摩に接した地方から入間郡に多くあるが奥秩父地方にまで浸透して居る。

一方，屋根の形ではないが南埼玉郡から北足立郡の一部にかけて角屋（^{ツノヤ}曲り家）と

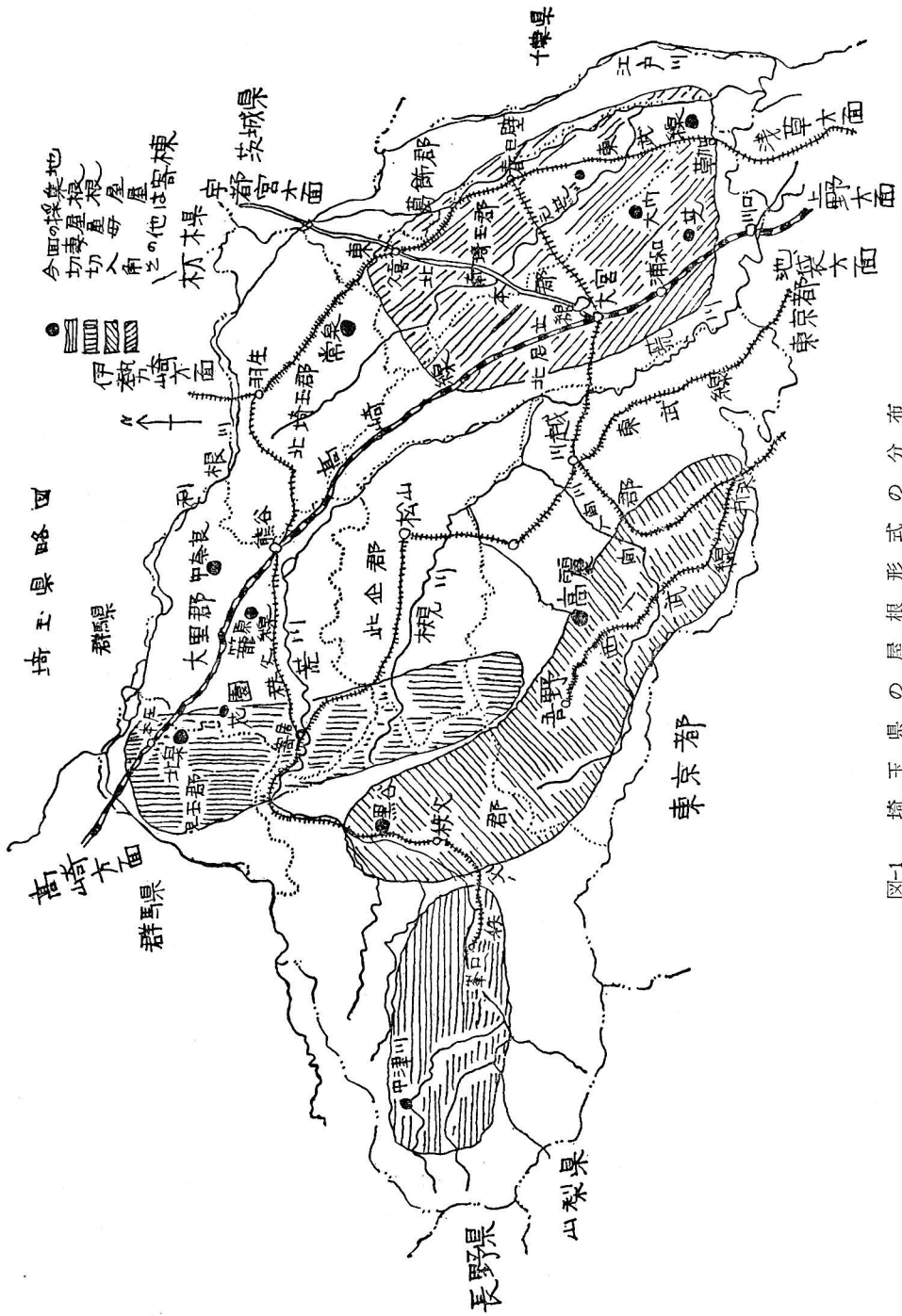


図-1 埼玉県の屋根根形式の分布

埼玉県の家

云う形がある。これは、大棟の屋根を一度切って別に直角の方向にもう一つ短かい棟をのせた形であるが屋根に谷が出来て、構造上のおさまりを悪くしている。

屋根の形式の分布は以上の様であるが、その堺は判然としない。むしろ埼玉県の民家と限定したのに無理があるのかも知れない。従って形態そのものだけから言えば恐らく全国的な分布領域を持つと思われる。

ここで、それぞれの屋根の形について簡単に説明を加えたい。

寄棟……全国的な形と云えるが、県内に於ても、間取りにあった自然の形であるから最も多く散在し、特に荒川流域を中心にした平野部に見られる。然し、同じ寄棟でも棟に変化をもたせている。即ち、棟を竹簀子で巻き丸竹で押えたもの、割竹を並べたもの、棟平瓦あるいは一種の雁振りの様な曲面瓦で包んだもの、箱棟にして瓦を葺いたもの等があり、またこの他には岩松等を植えつけたものもあったが、今日ではみられない。

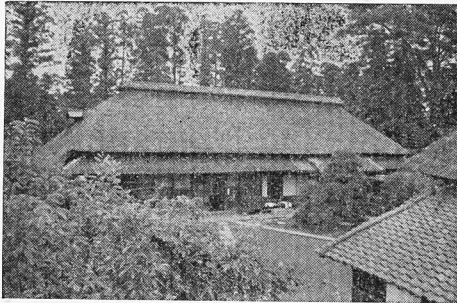


図-2 寄棟（浦和市^{アエバ}饗庭家）



図-3 切妻屋根（秩父中双里部落）

切妻屋根……別名石置屋根とも云われる。勾配も緩く、軒の出が深いのが特徴である。この形式は長野県諏訪、塩尻、木曽路地方に源があると思われる、森林の豊富さが屋根葺材に表われたのである。

つまり、檜の樹の外皮を葺く檜皮葺^{ヒワダ}、その代用としての杉皮葺、あるいは檜を薄く剥いた板で葺く柿葺等が屋根葺材として用いられ、葺材が飛ばされない様に樹皮の上を竹（又は細い丸太）で押え、更にその上に石を置く石置屋根の民家が奥秩父地方の集落に残っている。この葺方には種々の利点がある。葺材を無理に締付けないので丈夫であ

ること、釘にこだわらないため下の方ほど厚くなり修理もその個所のみという容易さがある。一見粗末にみえるが構造材を豊富に用い家屋自体頑丈であり、妻側の束と貫の直材の構成は意匠的にもすばらしい。またこの石置屋根の大棟には、雀踊りと云う装飾がある。雀踊りのある大破風は、^{ハナ}端に大きな折釘のような受け金物を出して取り付け、鼻隠を破風に柄差しとし、楔で取付けているのは、構造的にも、意匠的にも特色がある。

切 屋 根……寄棟、入母屋の大屋根の前側一部を軒から切り込んでその部分の中2階あるいは2階にし、後方を平屋の葺下しにしたものを切屋根と呼

んでいる。これは、中2階、2階の床面積を増し養蚕部屋としたもので、床は板張りである。普通はがらんどうの部屋で養蚕が始まると使用される。前側の切り込みが明り取りにもなっている。

この形に似たものに山梨県勝沼附近の切破風造と云うのがある。こ

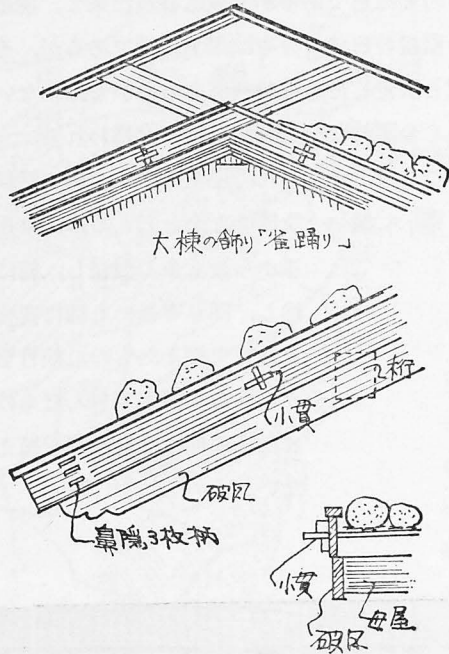


図-4 石置屋根の構造

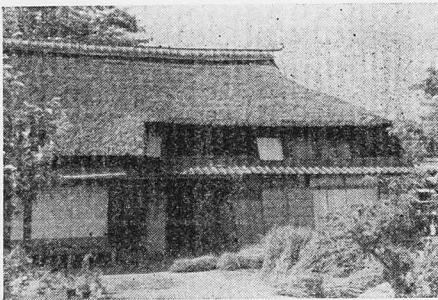


図-5 切屋根 (花園村字・野家)

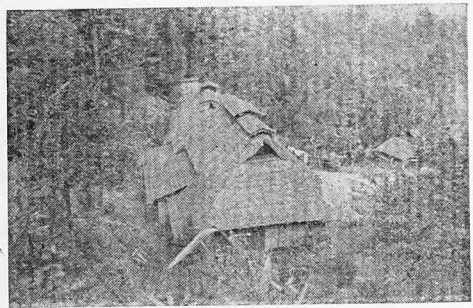


図-6 入母屋 (高麗の民家)

埼玉県の民家

れは、大屋根を破風に切って一段上げた形である。

入母屋……高麗部落を中心とした一帯に多く見られる形で北多摩地方にまで延びている。形は重厚な急勾配な屋根で、破風には重々しい曲線をもつ千鳥破風と茅葺の刈り込みに特色を示し、造形美を発揮している。

高麗と云うのは、高勾麗が唐との戦い（8世紀頃）に敗れて日本に帰化したものを、この地に住わせ、武蔵の曠野を開拓された部落で、先祖は遠く奈良朝に遡るのである。以来鎌倉期になって、高麗氏や中世の武士の要路になり鎌倉文化が栄えたのも高麗部落を中心とした一帯である。

従って民家の形態も円覚寺舍利殿に見られる様な、鎌倉期の様式を伝承しても何ら不思議はないと思われる。

また秩父郡地方にかけて伝播した入母屋は、高麗部落に見られる様な表現的なものはない。寄棟に僅かばかりの煙り出しがついた入母屋である。

角屋……一種の屋根形態からきた形として取りあげてみた。

角屋とは曲り家のことで、主屋の前方に張り出したものと後方に張り出したものとあり、前方のを曲り家、後方のを角屋と云っている人もある。

前方に張り出したものは、南部の曲り家、九州の鍵家造りと同じ様に土間部分の突出して厩としたものが多く、なかには納屋、仕事場として用いたものもある。

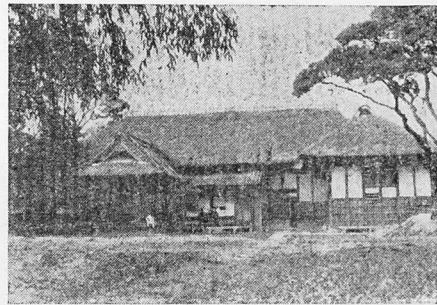


図-7 角屋（大袋、細沼家）

後方の角屋は、座敷部分の張り出しで、家族構成の増員による増築説が多く、田の字型（座敷）間取りから角屋を出したものらしい。

角屋は、一方、二方、あるいは、三方角屋と云うものもあるが、普通みられる形は、二方角屋で前方の厩、後方の座敷である。図-7

3. 間 取 り

間取りとは、住居の平面の事を云い、部屋のつながり、組合せから出来ている。

日本の民家は、柱が基本となり建てられてあるから、柱間、壁、障子などをたてて部屋を囲む。その囲まれた部屋を間内^{マウチ}という意味で間と呼んでいる。つまり周囲の外壁と部屋の仕切とで間取りが出来るわけである。

原始住居の炉を中心とする一部屋の住いは別として、民家を代表する農家は、基本の間取りについて大きく二つの型に分けられる。即ち、広間型と田の字型である。

広間型……土間と床からなり、床の部分は炉中心である。食事も客の応対、仕事にいたるまで全てが炉の囲りで行われる。従って炉端の座も規められているのが地方民家を尋ねると見られる。

この型は、“でい”と呼ばれる部屋が中心となりそこには炉も切られて居り、山間部の地方に多い。

田の字型……広間型の間取りから幾つかの部屋が付け加えられて出来たものと思われる。

田の字型にも縦の喰い違い型、横の喰い違い型あるいは、整形化された型等種々と挙げられるが、一般的に、喰い違い型が古い様式で次第に田の字型に進歩したとみるのが妥当であろう。

田の字型の座敷に床の間、棚、書院がつくのは、書院造以後の影響で、玄関と共に江戸時代以降に形式化したものである。

従って、近世の型は田の字型間取りであり、これは全国的に亘って変化は少いようである。

以上で、屋根の形式、間取りの概論を述べたのであるが、次に採集した埼玉県の民家のうちから幾つかを挙げ説明してみよう。

4. 採 集

秩父、中津川^{サジマ}の幸島家

元久2年(1205)に幸島覚範入道が中津川に居を定めたのが初めて、16世紀中頃全村焼払われ、其の後の状態は

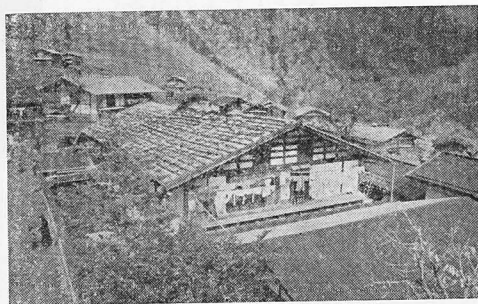


図-8 幸島家主屋

埼玉県の家

明かでない。

幸島家の主屋も元禄10年（1697）以前の記録は見当たらない処から、それ以後の建築と考えるのが適当と思われるが詳しいことはわかっていない。

主屋は、図-9 に示す様に9・5間×5間の総2階建に縁側や下屋をつけたもので、石置屋根にしてあったが、近年改造修理のときに鉄板葺に改め、現在は大屋根の片側のみにこの地方特有の石置屋根が残っている。

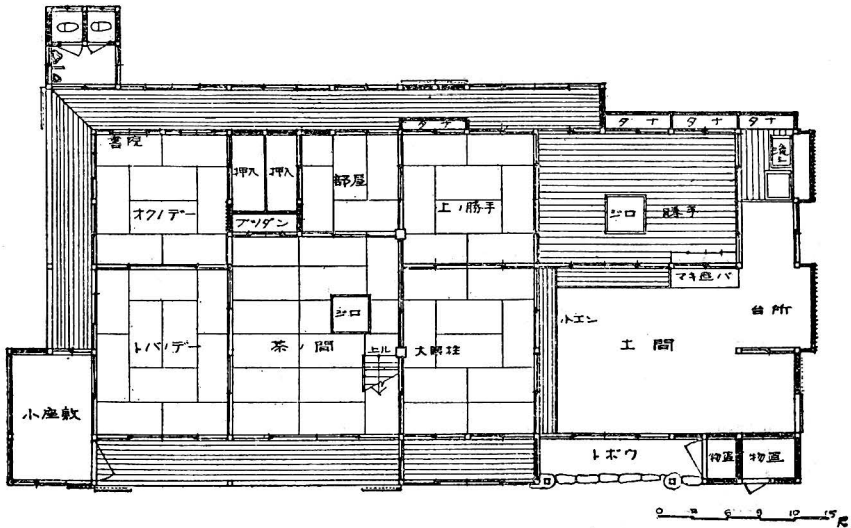
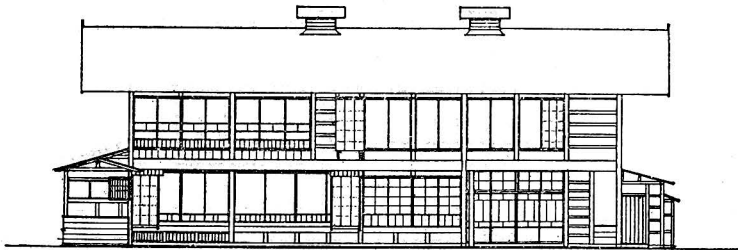


図-9 幸島家の間取り



同上正面

建築当初は、一階畳敷の部分だけの建坪で、2階は、低い蚕室となっていた。土間

の部分、明治5・6年(1872・3)の頃の増築でその時、屋根をもち上げて2階の天井を高くし住いの室を造ったと云う。

間取りも横の喰違い型であり、往時は茶の間が住いの中心であったと思われる。

構造は、柱間6.3尺を1間とし、大黒柱の他に梁方向にうず柱(共に樺、1尺角)があり、その他の各柱は、栗または檜材4.8寸~5寸角である。

秩父、黒谷の内田家

昔さながらの家で、古くは番屋、土蔵等もあって屋敷の周囲には堀をめぐらしていたと云われている。記録から山麗(和銅山)より現在の地に移築したと伝えられ、すでに慶安時代(1648~1651)に居住していたと思われる。

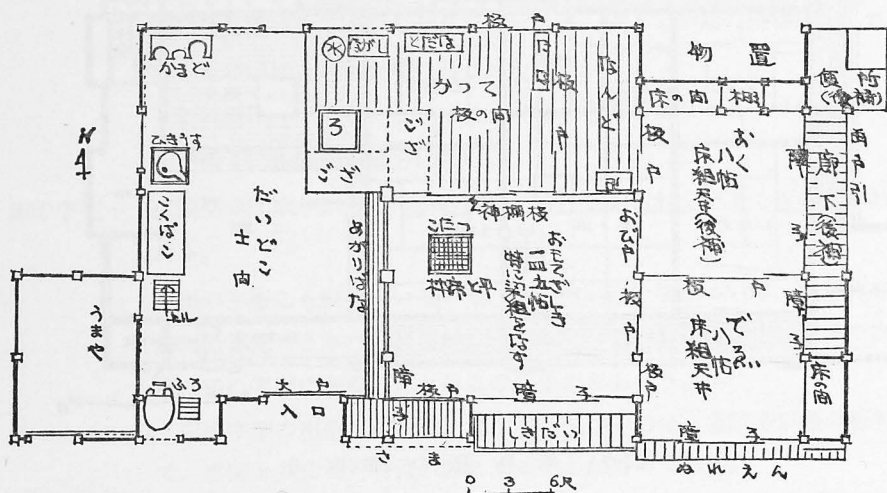


図-10 秩父黒谷内田家間取り

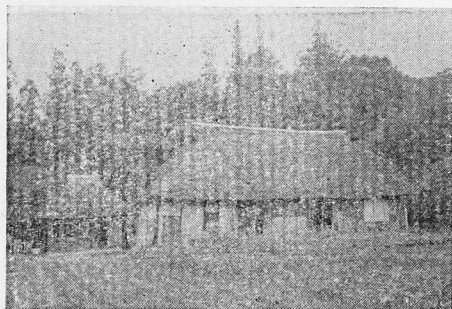


図-11 内田家の主屋

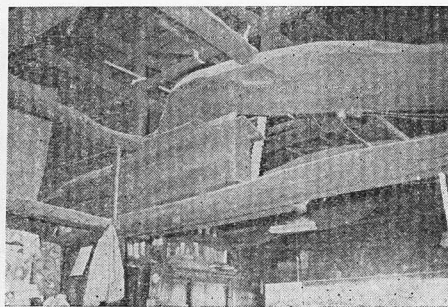


図-12 主屋内部の架構(神棚の裏側が見える)

主屋は、入母屋造りで、式台のある玄関がありかなり格式のあった家屋と思われる。間取りは広間型で移築の際、おく、でえ等の座敷が付け加えられたものであろう。

主屋の内部構造に好味がもたれる。即ち反り上った太い3間梁を柱へ架け渡し、その反りの中央に神棚をおさめている。そうして梁組を特に外から見える方向を太く見せ、威厳をたもたせると同時に構成美を発揮させる意味に於て、移築当時取りかえたものと思われる。この家も大黒柱と同じ様な柱（大黒柱と同寸）を梁方向の上り端に配している。

入間郡高麗の高麗家

高麗明津家は高麗王57代の後裔といい、高麗神社の社司もつとめている。主屋は規模小さく小農家の程度に過ぎないが、約200年前の建築である。入母屋造りで棟の中央に煙り出しを設けている。間取りは田の字型喰い違いであるが、裏側が3部屋になっているのや、でいの前の4帖等、部屋があるのは異型である。

内部の柱間は7尺間が多く、柱も梁も曲りの多い細いもので大部分手斧によるものである。

入間郡から秩父郡にかけての古民家を見ると、大黒柱の他に同寸の柱が座敷と土間を堺として梁方向に、2本、あるいは3本配置されてあるがこれは、格式のある家柄を示しているのかも知れない。高麗家も2本の太い柱が配されている。

北足立郡芝の須賀家

須賀家の先祖は、須賀忠左衛門と云い寛政頃安西甚兵衛の私領名主になった。その後代々名主役を命ぜられまた苗字帯刃を許される家柄となり、以来今日まで、芝の名門として繁栄してきた。

初めは近くの本屋敷に居住したと云われるが、安政の震災後、現在地に移ったとのことで、主屋は安政5年（1858）に建てられている（棟札による）。この主屋の場合改造の跡がみられないのは幸いであった。

間口14.5間、奥行6.5間、建坪110余坪もあり民家として大きい方である。寄棟造で棟は箱棟、間取りは大分複雑ではあるが田の字型から小部屋を多くとったとも考えられる。主屋の西側の座敷は客用の座敷で、入側をもって仕切られ、一段（4寸）と床が高くなっている。また、主屋にふさわしい式台の立派な玄関があるのはこの地方でも珍らしい。

構造的なものは、土間の梁桁の構成に見ごたえがある。広い土間に柱を置かず梁間5間を持ちはなすと云う構造である。これは梁を2重に、つまり挟梁にしているわけで、梁上は床を張り上部を納屋に使っている、また外廻りでは、せがい造と云って軒

埼玉県 の 民 家

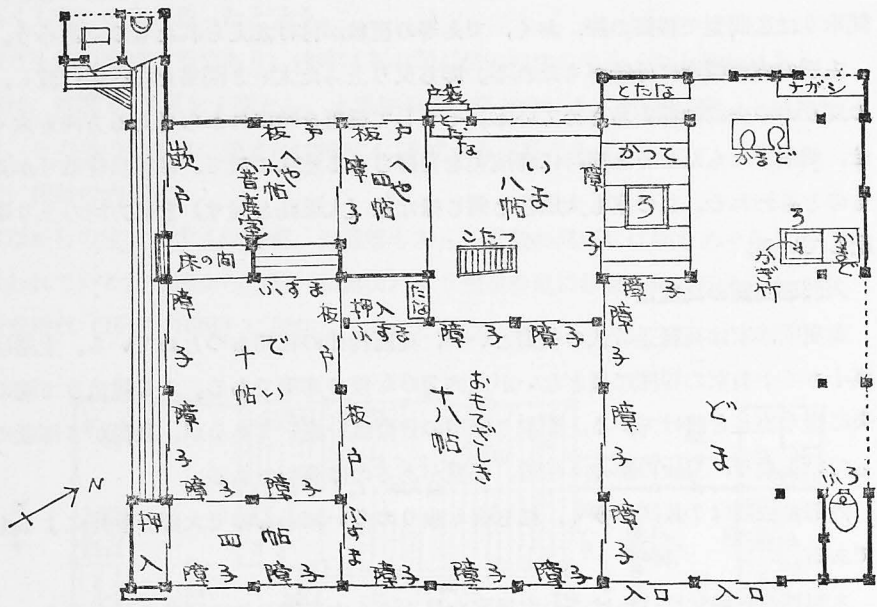


図-13 高麗家の間取り



図-14 高麗家の主屋（緑草会編，民家図集第9集）

埼玉県 の 民 家

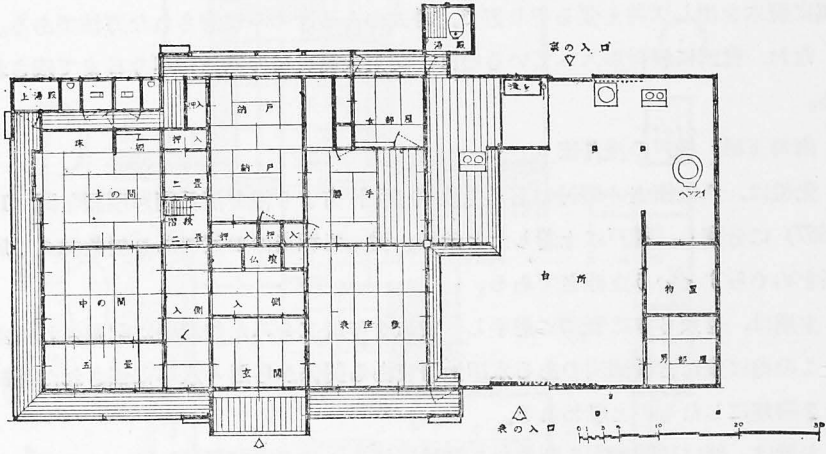


図-15 須賀家の間取り

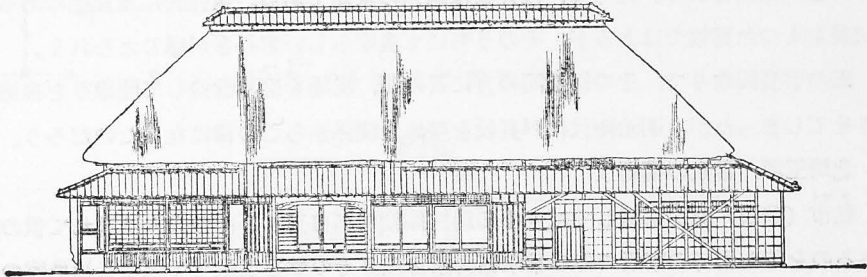


図-16 正 立 面



図-17 玄 関 附 近

裏に腕木を出し天井を張るやり方で、格式のある家の中に許された方法である。

なお、壁面に斜材が入っているのは、関東大震災後の補強材が今日まで残されている。

南埼玉郡、^{サイカチド}槐戸の浅井家

先祖は、八条領立ノ堀村の上名主浅井新平方より浅井清兵衛が明暦年間（1655～1657）に分家し、槐戸に土着したと云う。従って相当の旧家であり屋敷構えも周囲に堀をめぐらすという立派さである。

主屋は、喜永6年に晋請に着手し、安政2年竣工をみた様記録に記載されてある。

この地は東に古緩瀬川のある水田地帯である関係から屢々水旱に悩まれたため主屋を2階建にしたものと思われる。

主屋は、間口10間奥行5間の総2階建寄棟造に前方に横屋（角屋）と玄関を出し、下屋を下したものが建築当時と思われ、その後家族構成も変って明治末に座敷の裏手に角屋が増築された。従って、浅井家は両角の家屋である。全体的に重量感のある、威厳をもった建物ではあるが、そのうちにも農家らしい素朴さが感じとられる。

田の字型間取りで、その後土間の方に茶の間、机場を造り改造して間取りを複雑にさせてしまったが、明治時代に戸長役を勢めた関係からこの様になったのだろう。

北埼玉郡、常泉の福島家

^{サイ}私市（騎西）城が落城して城主小田助三郎頼興が自刃し、その夫人は逃れて世の鎮まるのを待ち当時の家臣である常泉福島家を頼りその姓を名乗って隠棲し福島家の先祖となったと云われる。其の後幕末に勤王“佐幕党”に加わった志士福島熊太郎が出て姓を小田と変えたのもこの由縁によるものであり、現在、生家は埼玉県の史蹟に指定されて居る。

常泉の屋敷は、福島家与野市下落合の郷邸として留守番を置いて保存されている。

住居は主屋約100坪、これに新座敷、表座敷併せて約130坪余の大邸宅であった。その建築年代は主屋が天明（1780）から文化（1800）の間に、新座敷は小田熊太郎の志士が会合したと伝えられ文久3年（1863）以前に、また表座敷は明治20年（1887）に建築されたよう記録その他から推定出来る。

主屋は14.5間×4.5間、4間×3間の2棟からなり、共に寄棟造であるが、大きさの割合に軒高が著しく低く、床高も1.2尺、天井高8.5尺、礎石上端から軒桁上端まで10尺たらずで、用材も主に松材が用いられ旧家としては極めて質素である。恐らく火災などの災厄の後に急拠建てたものと想像される。

新座敷はこれにひきかえ工作も最も優れているし、表座敷も数寄好みに建築した立

埼玉県民家

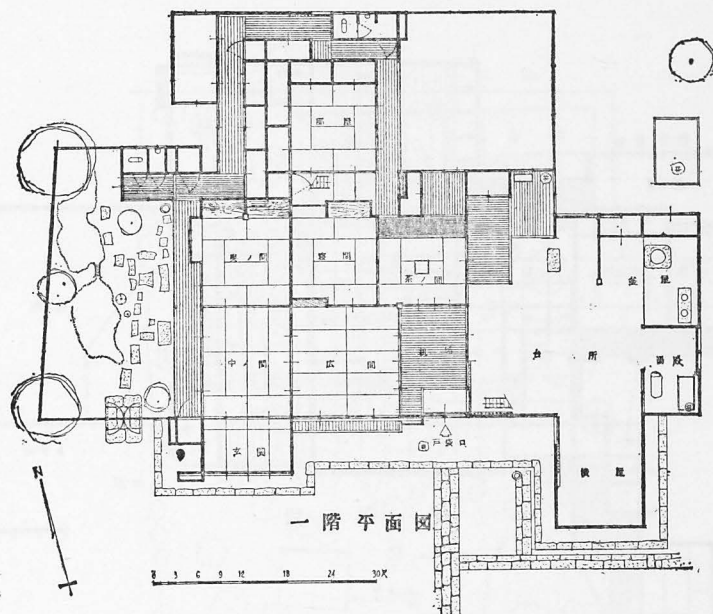


図-18 浅井家の間取り

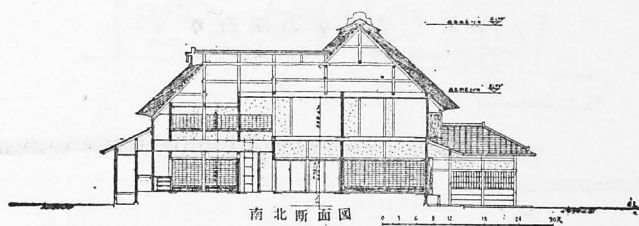


図-19 主屋断面

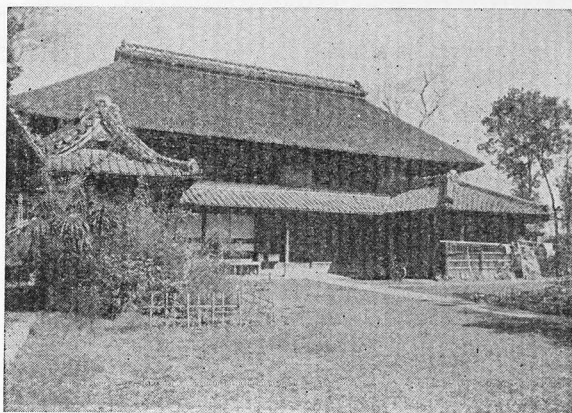


図-20 主屋

山 崎 弘

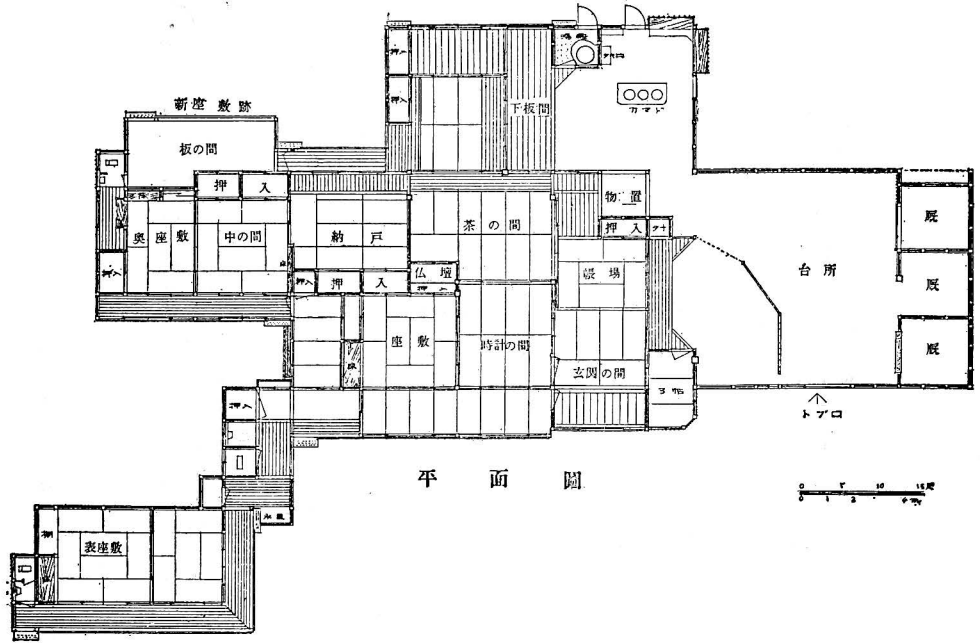


図-21 福島家の間取り

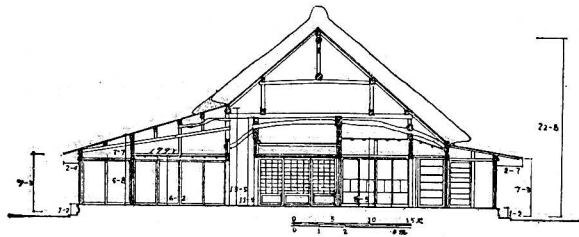
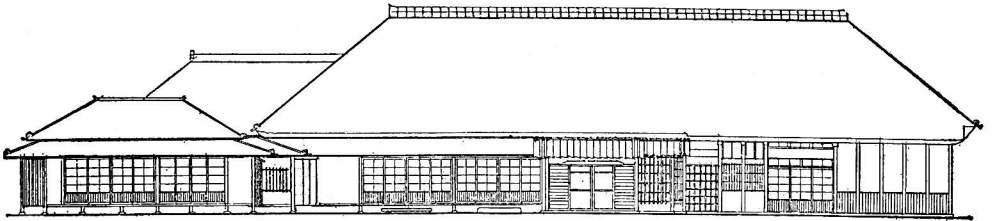


図-22 主屋正立面と断面

埼玉県 の 民 家

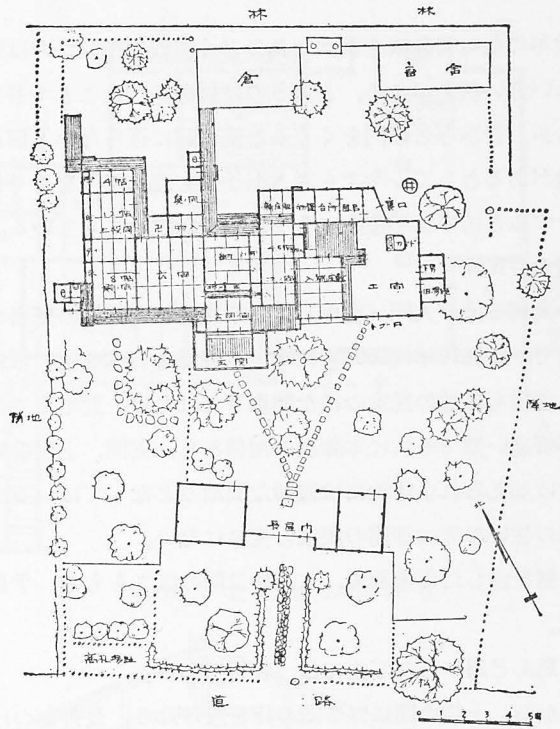


図-23 会田家の焼失前の配置と間取り

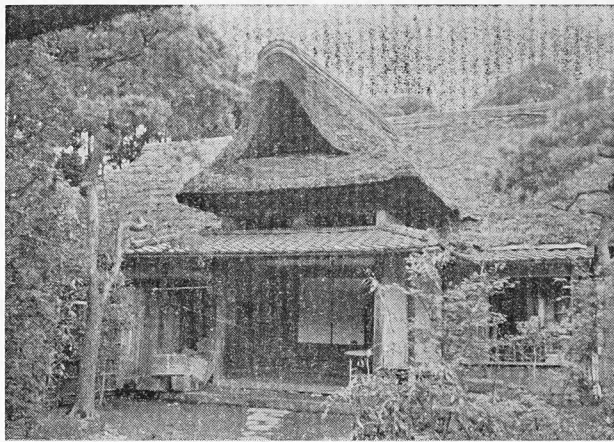


図-24 玄 関

派な座敷である。

主屋の屋根は近年になって鉄板を覆せた為ひどく美観を損ねたのは残念である。

福島家で珍しい云い伝えがある、と云うのは屋敷正門のことで茅葺^{ムナカド}の棟門の風雅な美しい形であるが、昔からこの門をくぐると流行病に罹らないと伝えられ、厄病除け特に麻疹に郊験があるとして、今でも老人が子供を連れて門をくぐりに来るという、また門の手入れをすると凶事が起るといふ不気味な伝説をもっている。

北足立郡、大門の会田家

会田家は、旧日光御成道の大門（宿場）にあり往古は紀州様の鷹場の鳥見役や、名主役を勤める家柄で、元禄10年（1697）には、本陣職まで仰せ付けられると云う旧家である。従って、主屋も普通の民家の様な間取りではない。近年まであった間取りは、家族の住いの方が喰違い型でそれに本陣職の関係から、玄関、上段の間、その他と云う多くの部屋が付け加えられ全体的には複雑な間取りとなっではいるが、二つに分けて考えれば、家族の住いの方は普通の民家と変りはない。

主屋も後方に角屋を出した寄棟造で、玄関は二間の広さをもち、千鳥破風の重量感のある屋根である。

構造材も樺材は殆んど用いられず主に松、杉材である。

特に本陣の関係から、上段の間には2間の床を設けたり、長押をつけ、天井も猿頬天井にして部屋に技巧をこらしている。

この主屋は、天保以前（1830）に既にあったと思われ、天保4年の災害によって改修が行われて今日に至ったわけであるが、昭和35年に火災の為焼失してしまったことは、何ともしのびがたい。

大里郡、箆原の北爪家

先祖は、北爪新八郎といい天正年間（1650年頃）北条安房守氏邦に仕え、北条氏が亡びて後は当所に住み、江戸幕府になってからは累代名主役を勤めたと云われる。また全盛期にあっては田畑100町歩を有した豪農で、大小の建物を配置した構えは全盛期の名残りであろう。

主屋は、本棟造といわれる構造で、長野県諏訪地方に見られる民家と類似した妻入りの建物である。この他には武川^{タケカワ}の部落に一軒見られるだけであって埼玉県にあっては珍しい民家と云える。

つまり、4本の太い柱（大黒柱も含む）を用いて長方形の位置に配し、その柱に大梁を渡し、束を立てこれに棟木をのせて、長手方向に大きな妻をかけた手法であり、大きな屋根の割合に部材が少ない。更にのぼり木を組み母屋を1.5尺間に繁く配置し、

埼玉県の家民

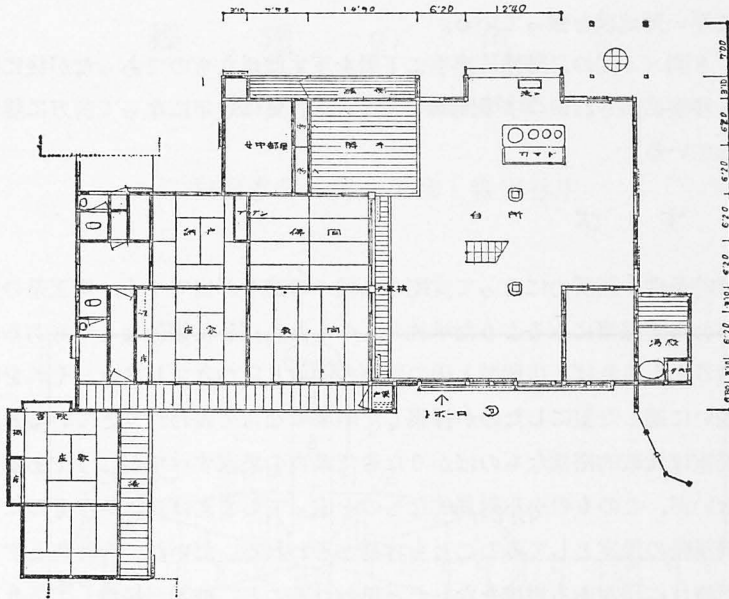


図-25 北爪家の間取り

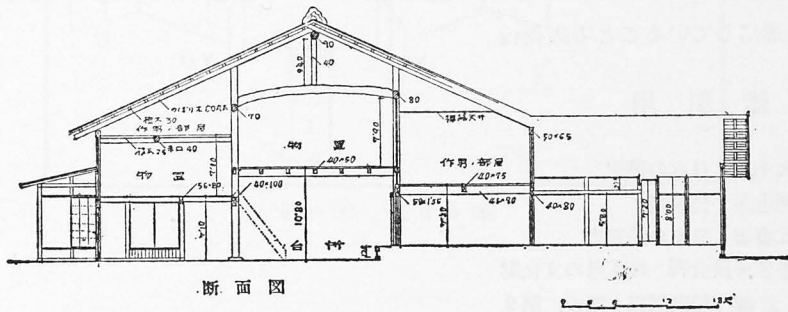


图-26 主 屋 断 面

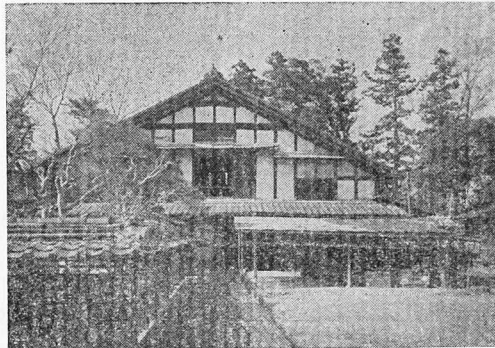


图-27 主 屋

桎を省略して厚い野地板を張っている。

間取りは、8間×4間の二階建に裏手に下屋を下す簡単なものであったが後に座敷、納戸が他から移築拡張され田の字型間取りとなった。更に近年になって前方に離れ家が建て増されている。

5. む す び

民家は地理的条件や経済力によって支配され種々の造りが出てくる、埼玉県の民家もそれにたがわず採集にみるような単純のものもあればまた複雑なものもあるが、基本的な間取りからみれば、広間型と田の字型の間取りにつきてしまう。それを改造し、個々の住いに適した型にしたのが採集した結果になって表われてきていると思う。

これらの民家は比較的裕福なものばかりなので県内の民家すべてがこうであるとは断定は出来ないが、このものから附属的なものを取ってしまえば基本的なものにかえり一般的な埼玉県の民家としてみることも容易と思われる。だいたいの特徴とするところは、江戸時代に現在ある規模をなしたと思われること、柱間が平均して7.5尺以内の小間が多いこと、それに山間部、丘陵地あるいわ平坦地によって地理的な条件にあった形にしていることである。

文 献 引 用

今和次郎著 日本の民家

蔵田周忠著 民家帳

藤田元春著 日本の民家史

埼玉県教育員会刊 埼玉県の文化財

緑草会編 民家図集 第1, 第9

拙稿 武蔵平野部の古民家

工学院大学研究報告(5, 6, 8, 10, 11, 12, 13号)

拙稿 大門宿及び其の本陣について、建築学会論文報告集69号

(本学助教授)